

『中の根本の言葉を章とした知慧（根本中論）』

（第九章）

視るや聴く等や、  
感受する等をも従えた  
ものである、それらの  
以前にそれが有ると、或る者は言う。 1

事物が有るのでなければ、  
視る等と如何様になろうか。  
それ故に、それらの以前に  
その留まる事物は有る。 2

事物が有るのでなければ、  
視る等と如何様になろうか。  
それ故に、それらの以前に  
その留まる事物は有り、(仏)

視るや聴く等や、  
感受する等、まさしくそれ  
以前に留まる事物。  
それは、何によって名付けられるであろうか。 3

視る等が無くとも、  
もし、それが留まるとなれば、  
それが無くとも、それらは  
有ることになると、疑いはない。 4

何が何者を明らかにしようか。  
何者が何を明らかにしようか。  
何も無い何者かが何処に  
あろうか。何者かが無い  
何かが何処に  
あろうか。 5

視る等一切の  
以前に何かがあるのではない。  
視る等の中から他の何か  
が、他の時に明らかにする。 6

視る等一切の  
以前に何かがあるのではない。  
視る等の他によって、  
他の時に明らかにする。(仏)

視る等一切の  
以前に、もし有るのでないならば、  
視る等それぞれの  
以前に、それが如何様  
に  
あろうか。 7

視る者そのものが、聴く者であり、  
もし、感受する者もまさしくそれであるならば、  
それぞれの以前に有るとなるが、  
それはそのように、正しくはない。 8

もし、それぞれの以前に、  
視る者そのものが聴く者であり、  
感受する者も、まさしくその者となれば、  
それはそのように、正しくはない。(仏)

もし、視る者が他そのものであり、  
聴く者も他で、感受する者も他であるならば、  
視る者が有る時、聴く者となる。  
我も、まさしく多数となるだろう。 9

もし、視る者が他そのものであり、  
聴く者も他で、感受する者も他であるならば、  
視る者の時、聴く者が有る。  
我も、まさしく多数となるだろう。(仏)

視るや聴く等や、  
感受する等も、  
それより変化する、その大においても、  
それは有るのではない。 10

視るや聴く等と、  
感受する等も、  
所有する者が、もし無ければ、  
それらも有るのではない。 11

何か、視る等の、  
前と現在と後に無いものは、  
それについて有る・無いという、  
諸分別は退くとなる。 12

「宿住（前世での住）を考察する」という第九章である。

(第十章)

薪であるそれが、火であるならば、  
行為者と能作が一つになる。  
もし、木より火が他であるならば、  
木が無くとも、(火は) 起こるとなる。 1

常に、まさしく燃えることになるだろう。  
燃やすものが無い因より起こり、  
努めは無意味そのものとなる。  
そのようであれば、能作も無い。(仏)

常に、まさしく燃えることになるだろう。  
燃やす因より起こらず、  
努めは無意味そのものとなる。  
そのようであれば、能作も無い。 2

他に相互関係したことが無い故に、  
燃やす因より起こらず、  
常に燃えているならば、  
努めは無意味そのものになる。 3

他に相互関係したことが無い故に、  
燃やすものは無い因より起こった。  
常にまさしく燃えているならば、  
努めは無意味そのものになる。(仏)

そこで、もしこのように、  
燃やしつつあるものが薪であると思えば、  
ただそれのみがそれである時、  
何がその薪を燃やすものとなるろうか。 4

他である故に、接しない。接すことが無ければ、燃やすとならず、燃やさなければ、消えるとならず、消えなければ、自らの印とも具えて留まる。 5

斯くも、女性が男性に、男性も女性に接すが如く、もし、木より火が他であれば、木と接すに適うことになる。 6

もし、火と木は、一方によって一方が斥けられるとなれば、木より火は他そのものであろうとも、木と接すと主張するに至る。 7

もし、薪に相互関係して火であり、もし、火に相互関係して薪であるならば、何かに相互関係して火と薪となる、最初に成立したのは何ものであるか。 8

もし、薪に相互関係して火であるならば、成立した火を、成立させることになる。焼かれる薪においても、火無くして、そうなるのだ。 9

もし、相互関係して成立する事物は、まさしくそれにも相互関係して、相関対象が成立するならば、何に相互関係して、何が成立しようか。 10

相互関係して成立した事物であるものは、それが成立していなければ、如何様に相互関係しようか。もし、成立したものが相互関係したといえ、それが相互関係したとは、正しくない。 11

木に相互関係した火は無く、木に相互関係していない火も無い。火に相互関係した木は無く、火に相互関係していない木も無い。 12

火は他より来ず、木にも、火は有るのではない。その如く、木についての残りは、過ぎた・過ぎていない・歩むによって示した。 13

他であれば接しない。接すことが無ければ、燃やすとならず、燃やさなければ、消えるとならず、消えなければ、自らの考察を具えて留まる。(仏)

もし、木より火が他であるとしても、木と接すに適うとなる。斯くも、女性が男性と、男性も女性と接すが如く。(仏)

相互関係して成立する事物であるものは、それが成立していなければ、如何様に相互関係しようか。もし、成立したものが相互関係したといえ、それが相互関係したとは、正しくない。(仏)

火は他より来ず、木にも、火は有るのではない。過ぎた・過ぎていない・歩むによって、その如く木について残りを示した。(仏)

根本中論

木そのものは火ではなく、  
木より他に火も無い。  
火は木を具えるのではない。  
火に木は無い。それにそれは無い。 14

火と木によって、我と  
近く取るものの全ての次第は、  
壺や絨毯等と一緒に、  
残らず説明した。 15

火と木によって、我と  
近く取られるものの全ての次第は、  
壺や絨毯等と一緒に、  
残らず説明した。(仏)

我や、諸事物を、  
まさしくそれと共にあるか、別であると  
示す彼等は、教えの意味に  
通曉しているとは思われない。 16

「火と薪を考察する」という第十章である。

※ (仏) は、『根本中論』チョコロ訳 (『ブツダパーリタ』に引用された旧訳) で、パツァブ訳 (新訳) と異なる記述。

(顕) は、パツァブ訳 (新訳) ではあるが、『根本中論』本論と記述が異なる『顕句論』で引用された偈を示す。

DECHEN 訳